

カリキュラム考 I 幼稚園における英語活動の意義

— 生きる力・学ぶ力とは —

上 野 め ぐ み

要 旨

生きる力とは、生きる力を育む教育とは何か？ 具体的に、その力を育成するにはどのような教育内容を、どのような教材と指導法を持ってカリキュラムを立てるべきか？ 幼稚園教育が生涯を通しての基盤になると幼児教育の重責とその難しさを更に痛感する時代となった。家庭—幼稚園、幼稚園以降の教育との連携を意識下に置き、幼稚園教育要領を映し、構築されるべき英語活動を問う。現場に立ち、保育者との Team-teaching での複眼思考での活動を練って実行していく。この複眼思考での活動が望まれるべきカリキュラム編成の大きな鍵であろう。教育要領の原点に立ち返り、自身のカリキュラムを再考する。

幼稚園教育要領の側面から構築されるべき英語活動の模索 I

生涯学習における幼児教育の位置

幼稚園における英語活動のカリキュラムの意義と方向性はどうあるべきか？

保育活動と英語活動の連動を目指し、試行錯誤を繰り返しながらカリキュラムを練り、実践を進めて来た自身にとって、まず明言できることは、英語活動における保育者と園児のそれぞれの反応は、実際、参考資料などとの照らし合わせ以上に多くの学びと反省の機会を私に与えたということである。

ここ数年の園での実践とカリキュラムの再考によって幼児期の特質を踏まえたカリキュラムの本質はどうあるべきか、改善点を掲げ、今後の英語活動の教育課程に必要とされる要素を明確にしていくことが急務であると感じている。

園児の特徴は当然 年々違っている。ある年、機能していた事が、あくる年にはあまり機能していないように感じることもさもある。個々の興味の対象に変化が見られたり、長年の間、大きな変化なく、園児の受け入れや反応がとても良い活動。その園児達の活動に対する反応には根拠ある理由がきっとあるに違いない。あるいは小学校での英語活動への連携の糸口がどこかにあるに違いないと感じ始めるようになった。幼児期の活動の押さえるべき重要点は幼児期、

児童期、その特徴の差異はあろうが、やはり、コアとなるべき点は同じであるに違いないと感じている。

幼児教育とは幼児を対象とする意図的な人間形成のことである。一般的に区分される乳児期（出生～1歳）幼児期（1～6歳）児童期・学童期（6～12.3歳）青年期（12.3歳以降）の四期、あるいはマリア・モンテッソーリ女史によれば、人間としてほぼ完成する時期が24歳頃とし、四段階に区切る、第一期（0～6歳）第二期（6～12歳）第三期（12～18歳）第四期（18～24歳）それぞれ幼児期・第一期にあたる段階には、その時期にのみ発達する課題があるということを決して忘れてはなるまい。小学校就学前の時期の身体的発達、特定の精神機能、全体的精神構造とはいかなるものか？ 発達段階の区分についてはまた検証していく機会を持たなければならないだろうが。その時期の分け方の諸説の研究やまた、必ずしも年齢的には判断しきれない個人的な発達要素にどう対処すべきかなどについても機会を新たにもたねばなるまい。さらには、家庭教育と幼稚園における教育運動における英語活動への課題も考えていくことになろうか？ いずれにしても、幼児期、この幼稚園児と名が付く時期の英語活動のあるべき姿を問う機会として考察をしていこうと思う。

さて、幼児期の経験は、人としての生涯に渡る人格形成の原体験としての意味が大きい。人として誕生し、それぞれに課題をこなして成長していくとするならば、その時期の課題を明確に把握し、それに準じた練習に取り組み、学習してそのスキルを次段階に生かしていくべきであろうが、幼稚園の時期は、家庭内の養育と小学校以降の学業的教育の橋渡しの時期にある。家庭内の養育を引き継ぐ〈保護〉と、家庭外の〈教育〉の双方の意味を持つ〈保育〉の時期に当たるわけである。幼児期本来の発達を歪めることなく、幼児期にふさわしい教育の形や内容とはどのようなものか、はっきりと具体的に示されるものは、英語活動にはいまだ無い。遊びの要素と学業の要素をいかにバランスよく配していかなければならないのかの指針が無い。就学前に何を優先順位の一に据えなければならないのかは、多分目の前にいる園児達を観察して決めていくべきなのであろうか？

急速に心身や筋肉が発達し、言語力・識別力が身につく、自律性を獲得するこの2～3歳期には、当然 英語活動においてもそれを強化すべきであろう。たとえば、身体的な動きを十二分に取り入れ、動作と rhythm を組み合わせた活動・音を focus したゲーム、識別を目的化した matching-game の導入、繰り返しを厭わない時期に可能な活動、自己制御力の発達に合わせた活動などである。

目的性や競争心の萌芽、自発性の獲得の見られる4～5歳には、更に質、量を変えたゲーム等を有効に活用し、自ら活動に参加する気持ちを起こさせる内容と方法が必要とされよう。

人として通るべき一定の教育課程、それは個々人によっても当然違っても言えるが、共通性として押さえる要素、それが、身体的特徴と機能的特長、知的好奇心の対象を知ることである。カリキュラムは、教育内容 (educational content) と教材 (teaching materials) と指導方法を一定の意図の下に整理・配置したものである。家庭の中では、日常生活の中で自然

に体得する事柄にカリキュラムは存在しない。現場での教育内容・教材・指導方法研究の重要性は言うまでもないことである。幼稚園における通るべき一定のコース、つまり、まずは教育課程（Curriculum）の意義を明確化し、そのカリキュラムへの照らし合わせから、まず始めることにした。

幼稚園教育の一般的なねらいと内容は、幼稚園教育要領に示されているが、その全体像を見通してみることにする。

1：心身の発達を助長する

幼児自身が自分の心身を発達させるには、保育者が役割を認識した言動を取ることが基本とされる。園児と保育者の一日を通して垣間見る機会を得た英語講師は 保育者と園児、あるいは園児と園児の保護者、園児間の言動など園内での様々な様子を三年間観察してきた。それぞれの関わり合いは、連続性を持ち、三年保育という一区切りの中で様々な事柄を明示してきた感がある。年少では、10月からの10分の英語活動年間8回、年中では15分年間32回、そして年長では20分年間32回の英語活動が実施しされてきた。

英語活動以外にも保育内容に連動し一泊二日の冒険旅行への参加、運動会やこども劇場、各学年の保育活動への参加、日常の園庭や保育室での園児との関わり、昼食への参加などを可能な限り試みてきた。英語図書や英語活動に関わる壁面（英語環境の整備など）に関しても保育者との連携を依頼し継続してきている。結果、どのような効果が現れるのかは、まだ具体的には現在、データを収集段階であるが、私自身の感触としては、英語活動の時間のみ幼稚園に身を置いていた当時と比較すると、個体差は勿論あるが、園児との実際の接点が増ただけではなく、園児自身による英語講師へのアプローチ（話しかけや実際の身体的距離の変化など）明らかに距離をおいていた園児の変化を見て取れるようになってきている。また、保護者との接点に関しても、保護者会への参加など行事に定期的に参加し、園児の家庭へ配布目的の年間を通しての園便りの中での指導報告書等、あまり目新しくはないが、定期的に英語に対する発信を継続していることで、保護者からそれらに関する質問、家庭での園児の英語に対する関わり的情報を得られるようになってきている。英語活動では知り得なかった園児の英語に対する情報を得ることは貴重なことである。また、英語活動内での反省点、改善策を保育者と共に、短時間ではあるが、即時に意見交換が可能となった。活動内において、園児に何が必要で、何が不必要かを選択する際の大きな指針が、保育者の意見である事は多く、保育者と講師間で交わされている各活動についての意見交換ノート（以前は活動毎にシートを講師側が渡し、意見を書いてもらう形式だったが）、今年度より一冊のノートに変更し、各保育者が全ての意見や流れをお互いにチェックできるようにした。流れ、園児の反応、改善点、うまく機能した点、疑問点等、それぞれのスタンスで感じたままを書けるように、質問や考えを、活動のあった曜日から次の活動までゆっくり記入できることは、単純ながら大きな改良点であったかもしれない。園児自身の状態を的確に把握している保育者の視点は英語講師にとって大いなる力であることは

間違いがない。常に幼児教育の基本的目標〈主体的自我の形成〉を意識下に持っている保育者の園児への声かけのタイミングと言葉の選択は英語活動の際に非常に有効である具体例であろう。保育者の園児に対する言葉かけのタイミングと言葉の選択は過干渉、過保護、放任などの問題を起ささないよう、保育者の経験や観察、努力と保育者同士の意見交換等によって可能とされるスキルと言えよう。

〈健康〉

健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。

TPR (Total Physical Response) の活用。

Stretching；集中力の持続と英語活動と保育活動との流れにメリハリをつけるため、伸びをする形でTPRを終了する。

Stretch your body! は単なる一動作であるが、講師自身にも気持ちの良い動作である。また、Close your eyes. や Zip your mouth. Straight your back. Relax. などの指示も有効であるが、講師の態度、顔つきなどの観察力の大きな園児は、講師がどの程度の気持ちで指示しているのか測っていることを決して忘れてはならない。

〈人間関係〉

他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。

Game：ルールを守ることによってFairであることの意味を知る機会を得る。

前述のとおり、園児と講師の信頼関係は、非常にclass-managementに大きな影響力を持つ。園児に対する保育者の言動の適宜性はteam-teachingの最大のプラス要因のひとつである。園児対園児のトラブルについても、全員の問題として投げかけ、自分以外の所で起きたことといった捉えかたという形にはせず処理されることで学ぶべき機会として扱う。最近の問題は、ゲームなど、自分の番ではない時の集中力のなさ、他の園児に対する注目が薄いことが挙げられる。待つこと、我慢することに対する園児の変化には、講師と保育者の対策が必須となってきた。

〈環境〉

周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。ホワイトボードにはるタイプの教材に対する興味が非常に強い場合、自分自身の手で触りたい、試してみたいといった反応がある。教材に対する興味は活動への動機付けとなる場合もあり、今後は、各クラスで活動後に置いて使用できるような耐久性の高い教材も必要だと考え、試作している。また、活動に使用した絵本big bookや通常サイズの絵本などは、担任保育者の判断で使用できるよう渡すことを心がけている。

仲良しコーナーに置かれているbook-standにも意図的に英語の本をトピックや季節に合わせ、保育者によって置かれた本に混ぜて置くようにし、環境整備をしている。また、人間環境も大切な要素である。出来る限り園児との会話は英語を使用するが、このところ、年長の園

児などは工夫をして英語で話しかけてきたり、日本語を不思議な intonation に変えて話しかけてくる。なんとかして伝えたいとのメッセージが園児の中で生まれているに違いない。

英語図書：保護者との接点づくり・情報交換

導入したトピックに関連した壁面づくり：年長・年中組の仲良しコーナーや階段壁面の活用と行事に即したみくるルームやホールの壁面づくり。

こども劇場の活用。

園庭での英語活動。

ホールでの英語活動。

英語活動以外での園児との接点づくり：登園時の玄関での communication ・昼食時のクラスでのお弁当時間の共有。

〈言葉〉

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

英語活動のルーティン：warm-up としての効用と自信付け。

同じトピックを異年齢に導入し、三年間持ち越しの theme として扱い：段階を経て経験する機会を設ける。

身近な言葉の導入に関していえば、多くよりも絞って導入をこころがける。日本語に関しては、出来る限り適切な表現で保育者に発話をお願いする。

Book-reading ・ Story-telling：大型絵本・紙芝居・通常サイズの絵本・日本語の絵本の活用。

Story-guessing：あまり 園児にとって予想のつかない絵本の筋を推測する活動。

Story-making：意外性のある話の展開を紙芝居形式で進めていく。

〈表現〉

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

Coloring：今年度導入予定の活動：listen and do：TPR の変形として英語での instruction を聴きながら例えば、Halloween の decoration のパーツを作っていくなど。

Air-writing：26文字を指で書いてみよう：文字を書く能力は非常に個人差もあり、筆記用具の持ち方・筆圧・クラスの大きさ（人数）など様々な要素が整って初めて到達しうるものであると予想される。そこで、指や腕、体を使って文字を表現する活動を取り入れてみようと考えている。年長組は四月より文字と音の関係性についての導入が行われてきた。Quiz や歌・chants 等で最初の文字と音の識別、後半には最後の文字と音の識別にも挑戦する予定である。次の五感の活用にも関わってくるが、文字の識別を音のみに限定せず、園児同士、お互いの手のひらや背中を使って文字の書き合いを game 化しようと予定している。

五感を活用：

Touch and guess：触れた感触だけで文字当てをしたり（5 CM X 5 CM の硬い紙に文字が、砂文字になっていてなぞると分かるようになっている。）game として使用。

言葉遊び。

ベビーサインを使ったジェスチャーの導入。

園児たちとのコラボ覚えさせる作業から作る作業への移行。

自発的活動としての遊びが幼児の発達に果たす役割には非常に大きなものがあることは周知の事実だが、彼らが、興味・関心を持つ対象は、彼らの日常の観察によって絞り込むことが出来よう。その遊びは、Vygotsky, L. S. は発達の最近接領域に属するものと言っている。

平成10年12月に幼稚園教育要領の改訂が行われ、その新たな基準は平成12年度から実施、完全学校週5日制は平成14年度から実施され現在に至っている。

ゆとりのある教育活動を展開し幼児に豊かな人間性や自ら学び自ら考える力など生きる力の基礎の育成を基本的なねらいとして行われてきた新たな動きが、現時点ではどういった影響力をもって来ているであろうか？ 幼稚園教育の基本を踏まえ、各幼稚園は、いかなる教育課程を編成し、創意工夫を凝らし実施しているだろうか？ 現場状況や幼児の実態を把握しつつ保育者が、その経験と生かすべき資料をもって立てられた教育課程＜具体的には、年間カリキュラム、週案、日案など＞を知ることによって英語活動の資料・指針とし、また、園児の日常生活の考察していることで、得られたものを活動のカリキュラムに生かしてみることにした。

園児の日常生活からのヒント：環境の利用

幼児は家族という距離の近い人間関係を軸に成長し、幼稚園という新しい集団社会に触れ、その中で自らの家庭から生活の場を変え、今までのある程度限定されていた人間以外の他者との関わり合いを持ち、今までの興味・好奇心を少しずつ広げていく。依存から自立への移行が始まるのである。同年代の幼児と時間・空間を共有することによっての刺激は、予想外に大きいであろう。また、年少・年中・年長という異年齢の集団生活から得る刺激と、それらに対するかれらの反応は保護者から離れての生活という環境によって、さらなる自立の要素を強めていく。

登園から降園・園児の行動：保護者と共に登園する園児が最初に保育者と顔を合わせる際に交わされる挨拶の類には発見が多い。私自身が門の鍵を開け、挨拶をする機会を求め、英語による挨拶、簡単な会話を試みることでの発見は、園児と私自身との距離のとり方である。遠くから英語講師の姿を見つけた園児が嬉しいことに〈Hello!〉〈Good Morning!〉と走り寄ってきてくれることもある。が、大部分は、恥ずかしそうに保護者の後ろから〈Good Morning!〉と答える。中には〈How are you?〉との問いに〈I'm fine, and you?〉と答える園児。〈おはようございます!〉と日本語でしっかり挨拶をする園児。日本語で挨拶をした後に英語で挨拶して満足気に保育室に走っていく園児。何度も何度も〈Good Morning!〉と繰り返す園児。登園時に垣間見る園児の英語に対するアプローチには、園児の英語講師に対する距離さえも知らしめる。英語講師が定期的に門での挨拶をするようになる事で、園児に慣れが見られ、この試

みの routine 化によって得られる効果についても追って試行していこうと考えている。

さて、挨拶についての具体的内容を示していくことにする。

英語活動の挨拶は、午前・午後など活動の時間帯によって変化を持たせていることは当然だが、Good morning! Good afternoon! Hello! How are you? の他に天候、日付け（月・日・曜日）と続き It's hot! It's a nice and beautiful day! It's muggy. などの表現を加える。その際、It's a nice and beautiful day! を導入の際は一段階目 A beautiful day!

二段階目 A nice and beautiful day!

三段階目 It's a nice and beautiful day! と話す速度は変えず、分割して練習していく方法を必ず使用している。前述の通り、保育者と講師との Team-teaching を実施していることで、適宜に母国語の使用をし、園児の理解の度合いの把握を心がけている。また、baby-sign, 手話の活用を出来る限り導入し、言葉だけの表現に留まらない input を試行し始めている。歌と gesture 〈振り付け〉を導入し、動きにおいては園児と一緒に振り付けを考えたり、また、意味を持つ動きの活用、つまり、保育にも導入されてきた、日本語による手話付きの歌 〈こども劇場などでも発表〉の英語版の積極的導入ということである。複雑な動きには限界を感じるが、Baby-Sign の導入がどのように園児に対しての反応を得られるかは非常に興味深いところである。

保育活動との連動を軸として

英語活動の年間カリキュラム、更には月間カリキュラムを再考するにあたって、幼稚園の保育活動の数年に渡る年間計画との照らし合わせを試みると、活動内容を厳選するにあたっての糸口を見つけることが出来る。たとえば、routine 化している挨拶や warm-up として組み込まれている季節についての表現集に、新たに春であれば、It's getting warm day by day, did you see any butterflies this morning? 等を加えることも可能であり、その表現を常に、季節によって固定化し、〈だんだん。。。になってきたね！今朝は。。。を見た？〉などと YES/NO questions の表現内容に変化を加えていくことも可能になってくる。あるいは、It's very hot today, what do you see in our play-ground? Oranges or persimmons? と園庭にある果物についての導入も可能になる一般的な写真や絵による導入よりも幼稚園という環境をフルに生かし、園児の日常に密着した事物・ことばを常に意識し、園児の日常生活において目に触れる頻度の高い単語を織り込んだ表現に近づける努力をしていくことは、言うまでもないことであろう。単語から文章への配慮も必要であろうし、構音しやすい音の導入も初段階では必要である。

園庭で見かける小動物、あり、だんごむし、ちょう、せみ、とんぼ、ハサミムシ、かたつむり、なめくじ、更には、園庭で成育している野菜、花、園内の遊具など活動で扱う対象となりうるものは数知れない。その中の何を活動として focus していくのか、保育活動とどの程度の連動をしていくのが妥当であるのかを決めていくことは非常に困難を極める。英語圏の行事と重ね合わせながら、いかに効果的に、つまりは、園児の興味・好奇心を的確にとらえ、英語活

動によって生まれうる新たな保育活動への繋がりを常に意識し、各英語活動における園児の反応を保育者との連携によって、活動内容とその改善点などについて話し合いを意識的に持つことが必須事項となってくる。

英語活動の復習や予習を目的とした保育者との定期的な研修も、各学年が英語活動において今、何を扱い、また、各学年の保育活動にどの程度関わりを持っているのか、各学年のトピックが適宜であるのかを測る大きな役割を担ってきている。

近年、どの程度保育内容との連動を試みていくことが効果的であるのか、意図的に隔月にトピックに変化を持たせてきた。例えば、平成17年度公開保育でも園の保育者によって発表されたトピックでもあるが、クッキングなどの保育内容との連動に関しては英語活動に切り口は何にするべきか？材料の角度からの導入のなのか、料理行程のなのか、味覚からの角度での導入のなのか、全行程を導入しつつも、focusすべき角度を絞っていくことが重要であることに間違いはない。研究協議会でもハンドアウトとして配布された中のクッキングについての過去2～3年間の内容と特徴を抜粋し、考察してみると、年少組、年中組、年長組の一学期・二学期・三学期と各学期に導入されるクッキングを保育に取り入れている理由は、〈本園では、畑で育てた様々な野菜を簡単に調理し、スープや漬物を作り昼食時に一緒に食べることが、日常の保育に多く見られる。そこで、さらに自分たちで育てた食物や身近な食材を使って調理することを楽しめるよう、クッキングとして様々なメニューを企画し保育に取り入れている〉とある。また、クッキングを取り入れている目的として以下の項目をねらいとしている。

* 毎日の保育の中で日常と異なった楽しさを味わう。

* 日常とかけ離れすぎないこと。

* 誰もが嫌がることなく、楽しく積極的に参加でき、満足感を味わえる活動であること。

各学年の保育者の考え・意図として年少組のクッキングでは、前ハンドアウトからの抜粋を参照すると、

年少組のクッキング

* 入園して間もない子どもたちが集中して楽しめるものを作る。

* クッキングという経験が少ない子どもたちにとって全員が必ず出来、満足感を味わえるものにする。

* 集中力が保てる程度の一つ、二つの少ない行程ですぐ食べられるものにする。

* 興味が持てるように、ストーリー仕立てにするなどの工夫をする。

具体的な内容（三学期：コロッケ）

一学期（Jelly）、二学期（Hot-dog）のクッキングの経験を踏まえ

1学期、2学期よりもさらにレベルアップを図り、子ども達が喜び満足感を味わえるものにする。

H16年度には、こども劇場（発表会）の話に合わせコロッケに挑戦することを試みた。クッキングの行程としては、芋をつぶし、材料を混ぜ合わせ手で形を作り、卵、小麦粉をまぶすこ

とを行った。

以上が保育者の年少組でのクッキングの導入の意図と経過である。さて、年少組のクッキングにいかなる英語活動のアプローチが可能であったかを実際の英語活動内容と共に考察する。クッキングをトピックに年少組にいかなるアプローチが可能であったか、活動内容を試行錯誤したが、適当な大型絵本も、更には通常サイズの絵本も見つけることに難しさを感じ、こども劇場でのストーリーをそのまま英語に採用することにし、保育者のサポートを得、保育者が園児に下ろした登場人物、内容を導入した。コロケの材料、作り方を簡単に、ペープサートやマグネット付きの野菜の絵を用意し、活動の補助教材として活用し、材料の名前と動詞〈boil・cut・mash・mix。。。など〉をストーリーに合わせ input：講師が発話-repeat：保育者がリーダーとなり園児が発話-output・act：講師が gesture を交え、例えば、potato の発話時にジャガイモを示し、両手でジャガイモの形を作り、再び発話、動詞についても同様。その際、理解しやすい、さらに意味のある gesture がないものか、思案し、英語手話よりも平易な Baby-sign を採用、ただし、単語としてないものに関しては、年長組で導入した園児と考えた動きに統一。活動の展開としては、10月から英語活動であり、活動時間が10分と限定され、活動のサイクルは、月一度が平均であるため、活動内容は、前回の英語活動の核の部分のみの復習、つまり、数字、色、動きに限定し、トピックのみに変化を加える。年長組まで routine 化する挨拶、天候などについては warm-up の形式で導入し、クッキングをトピックとして扱う活動では、年少組の活動の範囲と考える数字 1, 2, 3, 4, 5, 6 の導入を Potato-counting として、Let's count them together! とホワイトボードにまず 5 つのジャガイモを one potato, two potatoes, three potatoes, more, four potatoes, five potatoes, six potatoes, wow! と input・output を数度繰り返し、次にはジャガイモを一つずつ減らしながら、six potatoes, five potatoes, four potatoes, three, three potatoes, two potatoes, one potato, none. と繰り返す活動や色の導入等をしていった。また、TPR 〈Total Physical Response〉などは routine 化させ、既習事項に 2・3 の動詞を加えていく。年少組・三歳児は、主体性が未発達言われる時期でもあるため、思わず参加したくなるような講師側からのアプローチ、環境設定が必要であり、また、何度でも繰り返しを嫌わない、厭わない特徴を十分に活用し、何度も繰り返す活動が有効であることは言うまでもない。

年中組のクッキング

各学年の保育者の考え・意図

* 保護者に手伝いをたのみ〈調理〉した実感を味わわせる。

* 年少の時には使えなかった、包丁や火を使用するなど年中組になった実感や誇りをもてるようにする。

* クッキング前日に導入し、翌日の登園を楽しみにできるようにする。

* 季節や行事にあったものを考える。

具体的な内容（二学期：みたらし団子・さつまいものお菓子）

ここでも一部、保育者の意図を抜粋すると。

* カレンダーや数字に興味を持ち始める年齢なので伝承行事にも触れる。

* 年長組の行事である芋ほり遠足で収穫したサツマイモの活用で年長組に親しみを持つための導入である。

* サツマイモの皮をむく、切る、つぶすなど、その年のメニューにあった行程を行う。

* 保育者の考察としては、クッキングをする上での約束事を守り、グループで力を合わせ作り上げる喜びを味わえる等、保育活動の教育的意図について非常に明確であることが理解できよう。英語活動で連動できる要素としては、三学期のお好み焼きの具材として登場した、こども劇場に登場したきのこの国の〈きのこ〉であった。Mushroom の言葉としての導入、きのこの数を数える活動：数 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12 の導入、色の導入：きのこの国の様々な色合いのきのこの matching-game 〈神経衰弱形式〉でのお楽しみなど、あるいは、same or different game きのこのかさの部分の dots の色形、数の違いに気がつくかな？ などのゲームの導入を試みている。

年長組のクッキング

各学年の保育者の考え・意図

* 手伝いの保護者の人数を減らしたり、依頼せず、自分達で行い達成感や、自信をつけさせる。

* クッキング以外の行程を行い、さらに充実感を持たせる。

* 作り方を保護者以外から教わることにより期待を持てるようにする。

3 日～一週間前から導入し、気持ちを持続させる。

* 買い物をすることによって地域の方と交流を持ったり、食材によってそれぞれの店があることを知ってもらう。

* 本物のお金を使用することにより、お金の価値を知る機会を与える。

二学期に行われたクッキングは、英語活動との連動として導入を計画。数年に渡って保育と英語活動の連動ということで、年間計画から近隣のお店への買い物にも同行し、英語講師のアプローチの方法にも幅が出来、園児と共に活動の浸透度を把握し、shopping の活動内容まで広げていく事が可能となった。園児が畑で育てたものを使用することから年間を通じての活動とも言えよう。Chants によって材料を導入し、rhythm に合わせて chorus reading, gesture をつけて作り方を英語によって telling-aloud, 各クラスにはそれぞれ chants-chart 〈単語の部分は切り絵を使用〉をはることが、常に園児の目にとまり、適宜に保育者による強化〈繰り返し練習〉がなされ、効果的な定着をみることとなった。また、既成の音源を使用し、時期的に Halloween の時期に当たるため、他の活動とも重ね合わせた。今年度は、従来の Curry から Stew に変更することに決定している。Chants の導入と後日のクッキングにも英語講師は参加し、魔女の stew として、各クラス 6 グループずつになり、思いつくままの魔女の stew の絵を予定している。

数年にわたっての活動については、改良点が保育者側からも積極的に出され、保育者・園児の日常を念頭に置いた、より自然で効果的な一連の導入、活動、定着、展開を見ることになったと感じている。保育者の導入は年間を通じての theme を基礎としたものであり、園児の活動に対する期待感は、予想以上に高く、保育活動と連動させたことで、英語活動への積極的な動機付けとなっていた感がある。五歳児の特徴としての環境を100%準備せず、creative な活動、更には、個からグループ、クラス活動への参加、自分以外の人間と関わる力を育成する活動内容により近くしていくことも意識的に構成内容として組み込んでいくべきであろう。

年長組の年間カリキュラムを例にとって平成17年度と平成18年度の年間計画の抜粋を次に表す。

幼稚園の年間計画表は、当然年度ごとに各担任・学年付の idea と話し合いによって特色あるものとなっており、年間を通じ扱われる theme に関して言えば、近年同じ展開になったことがないように記憶している。行事は行事・健康〈生活習慣・あそび〉・人間関係・環境・言葉・表現〈製作・うた〉の項目に沿って立てられ、英語活動も4月の15日前後に毎年始められる。年少・年中との大きな相違点は、みくるルームと名前のつけられた保育室とは離れた場所に園児が入室し20分間の活動が行われることと言える。ただ、園の諸事情、あるいは意図的に保育室で英語活動を計画することもあり、毎回の英語活動の場がそこで行われているわけではない。確かに、講師は移動することもなく、時間の有効利用も可能ではあるが、一方、前回でも述べたが、保育室での英語活動も非常に魅力的要素がある。

季節ごとの壁面は、英語活動にも利用価値は非常に高く、また、園児の作品の展示は見逃せない活用教材と言えよう。また、時々保育室を覗かせていただく機会を得たことで、多くの英語活動のヒントを得ることとなっている。園児同士の遊びやことばのやりとり、園児と担任・学年付の言動、保育者の声かけや活動の内容の把握、どの要素をとってもカリキュラム構成と見直しと再編成には欠かせない物と言えよう。例として2・3項目を挙げてみると、

〈言葉〉

- | | |
|---------------------------|--------------------------------|
| 4月：伝言ゲーム・BINGO・なぞなぞ・逆さ言葉① | —英語活動：letters and sounds |
| 5月：お話づくり①保護者の名前・住所・電話番号 | —What's your name? : yourself |
| 6月：お話づくり② | —What's this? : snail |
| 9月：聖徳太子ゲーム① | —What's the first letter? |
| 10月：聖徳太子ゲーム② | —What do you say? |
| 11月：お話づくり③逆さ言葉② | —Story-telling : animal |
| 12月：お話づくり | —Story-telling : Christmas |
| 1月：お話づくり④ | —Story-telling : Child-theater |
| 2月：お話づくり | —What do you wanna be? |

また、表現においては、

製作：英語活動では、仲良しコーナーを利用した Coloring・The very hungry Caterpillar

を年長に導入した際の簡単なモールによる caterpillar 製作など、一斉活動の形は本年度までとっていない。

4月：こいのぼり・手・母の日のプレゼント（デカルコマニー）・お祭りごっこ製作

5月：自分の顔・肖像画・父の日のプレゼント（マーブリング）

6月：父の日のプレゼント（木工）

7月：笹飾り

9月：三角旗・ジュースの絵・運動会ポスター・シャボン玉遊び・夏休みの絵

10月：魔女のスープ・お芋の絵・運動会の絵・Halloween goods

11月：クリスマスリース・アルバムの絵

12月：クリスマス製作

1月：素話の絵・こども劇場の大道具・小道具

2月：こども劇場の絵・大きくなったらの絵

<うた>

4月：友だちは友だち・トムピリピ・こいのぼり—英語活動 ABC SONG

5月：月火水木金土日の歌・Rock my sou—Seven days

6月：キャンプだほい・ずんごろぶし・もえろよもえろ・大きな古時計—Rain song

7月：やっほっほ夏休み・七夕さま・歌えバンバン—Rock my soul

9月：運動会の歌・Mix juice—Cicada chants

10月：真っ赤な秋・にじ・世界中の子ども達—Halloween chants

11月：手のひらを太陽に〈手話〉—Eency Weency Spider・Hello song

12月：あわてんぼうのサンタクロース・Christmas song—Christmas song

1月：こども劇場の歌—review

2月：こども劇場の歌・うれしいひなまつり—If you're happy and you know it

きみとぼくのラララ・思い出のアルバム

3月：一年生になったら・さよならぼくたちの幼稚園—review：年少からの歌～

遊びに関しては、ホール全体を使用した Treasure-hunting game など改良点も含め、次回に考察することにするが、園児の活動参加への動機付けは、やはり、教育的意図の感じられない遊びの要素の強い活動内容の方が当然強い。ただ、年中児時期からのゆっくり時間をかけたゲーム活動の際のルール決めとその徹底は必須要素である。一貫したルールの厳守が、園児との信頼関係によって守られてこそ意義ある活動となるに他ならないからである。たとえば、カリキュラムに結果沿えなくても、進度が遅れようとも、その徹底なくしては活動の意義はないといっても過言ではないかもしれない。保育との連動はまさしく、その核を共有することによって始まるといえよう。各学年の年間計画を軸に、月案、週案を念頭においての保育者との話し合いによってのキメ細やかな修正を加えることが肝心であるように感じている。園児の登園から降園までの観察に加え、各園児の状況把握について保育者からサポートを得られることは

class-managementにおいても負うところが大きいと言えよう。

月一度発行されている園だよりによる、活動内容と意義、導入歌の紹介、細かく言えば、園児の英語活動への直接の motivation 付けともなる英語参観についてのお知らせなど園児の家庭へのアプローチへはやや一方的ではあるが、意義あるものと考えている。

前紀要にて Slow-learning・Pleasure-learning を提案したが、年少・年中・年長と三カ年にわたって年間計画の中でそれぞれの年齢に応じた同じトピックを扱っていくこと、つまり、幼児期にふさわしい形でのトピックは、幼稚園という環境の下では当然 類似性を持つことになる。具体的に言えば、季節・行事に focus し、発達段階に適した語彙・表現・内容・質の深さを吟味しカリキュラム構成をしていくことも、試行している段階である。学習者である園児のこころとからだの発達に合わせ、その興味と好奇心に応じて、年齢によって異なる知的好奇心を満たすカリキュラム、つまり、園児のくもつと もつと知りたいという気持ちを育む——未知なるものを知りたい・学びたいという内側に芽生える必要感と新しい事に臆せず挑戦するこころとからだのバランスを育む——三年間の幼稚園の日常生活でゆっくり、丁寧に学ぶ姿勢こそがカリキュラムの核となる主要素であると思われる。カリキュラムは、指針となるべく丹念に練られるべきであるが、常に柔軟性を有し、昨年度の運動会後に行われた英語活動の例を挙げるならば、例年 家族をトピックにしてきたところであったが、運動会でのピーナッツ達を登場させることで、園児たちは、peanuts' family の歌、TPR、short story-telling を体験している。園児の活動への動機付けを機能させるには、保育者のサポートは大きな助けとなってきた。実際の英語活動内での Team-teaching、更には、カリキュラム再構成の鍵は、やはり、日常を姿と流れを知る保育者との多面的な協力であろう。

とにかく、言葉に対する感覚は、母国語と同じようにあるべきであると思う。

経験や体験の豊かさが感覚を磨き、言葉を育てる。絵本や物語などでその内容と自分の経験とを結びつけたり、想像を巡らせたりする楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること—幼稚園教育要領の第二章3内容の取り扱いの(2)にこうある。Big book の有効性、あるいは、flip-flap Picture-book を出来る限り導入するのは、そういった絵、しかけ、あるいは、例え英語の一つ一つに完全な理解が欠けていたとしても、こどものこころを奪い、集中させる力が絵や言葉に含まれているからである。どうしても、導入したい内容の絵本に関して言えば、保育者との連携で、英語活動で取り扱う前に、日本語による導入を依頼する例もある。また、その逆で、園児に理解しやすい位に話の筋を簡略化し、内容のフォローを後日、日本語によってお願いする例もある。こどもが一つの言葉をその言葉そのものだけではなく、雰囲気、声色、各々の想像力等によって再構築し、理解していくとするならば、作者の意図するところをはずすこと無くこども達に伝えていくことも、許容範囲とされるのではないかと思ひながらの自信のない導入ではないかと思う。Book-reading と Story-telling の使い分けをしながら、物語の内容の偏りや、また、こども達の感情面でのバランスを考慮にいれ、幼児期の理解力の特徴を把握し選択していくこ

とも、重要である。

平成18年度は、かなり貪欲に年中組、年長組とも Book-reading を導入し、Water, Seed Frog, Snail, Cicada 関連の Big books 〈自然科学〉 Numbers, Colors, 〈数字, 色の足し算〉 Eric Carl 氏のシリーズ, 動物のお話, 季節や年中行事のお話, 昔話, 怪物のお話, 魚のお話などトピックに対応した絵本を読んできた。年長組には小学校への希望を膨らませることのできるような本を数冊読んでいく予定である。幼稚園は小学校へ, 小学校は中学校へ, 中学校は, 高等学校へ, 高等学校はその後の専門教育機関との連携をとっていくことが出来なければ, 意味を見出すことは難しい。幼稚園で学ぶ楽しさを体感した園児は必ずや, 生涯教育へと繋がる道を歩んでいくのではあるまいか? 夢中になってだんごむしやありを探した経験を持つ子ども, 英語という母国語とはまた違った言葉に出会った子ども, じぶんの手で泥だんごをつくった子ども, 跳び箱にチャレンジして一度はうまくいかなくても挑戦することのできる子ども。自らの意志で人やものや自然の中で, 自らを発揮しその関わりにふさわしい言動を学んでいく。幼稚園教育の目標に掲げられた〈生きる力〉の基礎の育成は, 自分以外の存在との共生をいかに可能にしていくか? だんごむしに夢中になる子ども達は, 何故 興味の対象が団子むしなのか? を知ろうとする教育に携わる者の意識は, 現場からの発見や気づきによってカリキュラムに柔軟性を持たる余裕が絶対なければならない。

繰り返すことになるが, 第一章総則にある 1: 幼稚園教育の基本は, 教師が幼児との信頼関係を十分に築き, 幼児と共によりよい教育環境を創造するよう努めるものとする。(1)。。発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮し, 幼児の主体的な活動を促し,。。(2) 幼児の自発的な活動としての遊びは, 心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である。。(3) 幼児の発達は心身の諸側面が相互に関連し合い, 多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること。。ひとりひとりの特性に応じ, 発達の課題に即した指導を行うようにすること。。その際幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき, 計画的に環境を構成しなければならない。そして, 2: 幼稚園教育の目標 生きる力の基礎の育成, 3: 教育課程の編成では, 創意工夫を生かし, 特に自我が芽生え, 他者の存在を意識し, 自己を抑制しようとする気持ちが生まれる幼児期の発達の特性を踏まえ, 入園から終了に至るまでの長期的な視野をもって充実した生活が展開できるように配慮しなければならない。また, 言葉に関して言及した箇所を抜粋すると, 経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し, 相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て, 言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。とあり,

1 ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き, 自分の経験したことや考えたことを話し, 伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに, 絵本や物語などに親しみ, 先生

や友達と心を通わせる。としている。

言葉での表現を楽しむとは、2の内容にも明記されているが、文字などで伝える楽しみを含んでいる。英語活動の routine 化されている日常の挨拶をすることはあまり困難を感じないことであるが、自分なりに言葉で表現することなどは母国語以外の言語ではいかにアプローチ出来るか？ 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話すにはどのようなサポートが有効であるか？ は非常に創意工夫を求められよう。近年の園児の興味・好奇心の個人差は大きく、また、語彙数にも個人差があるように感じられる。五歳児の語彙数は5000語ほどとされているが、その語彙の使用の特徴にも個人差が見られ、母国語でさえじっくり言葉の選択をし、使い方を考えながら話し始める園児に〈ゆっくり〉自分の時間をとる、英語活動での Take your time などの声かけや Don't worry, I'll help you. などの言葉の橋渡し役としての保育者と英語講師の役割分担も重要素である。表現についても具体的にねらいと内容、内容の取扱いの中で、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造力を豊かにする。様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、楽しんだりする。母国語との比較や実際に色の足し算（ペットボトルの水に色を加えたり、混ぜたりする活動、実際お湯や氷、水に触って表現する活動。色々な素材に触ってみて表現する活動。音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しみを味わうことも英語活動に導入可能である。どの程度、いかなる方法で英語活動に取り入れていくかは十二分に考慮すべきであろう。さて、今回は原点に戻り、核となるべき幼稚園教育要領に立ち返り、実際のカリキュラムを例に一部挙げ、保育活動との連携という視点から考察を始めた。今回は英語活動からみた保育活動へのアプローチなど実際のカリキュラムの再編例を掲げ、保育内容との連動、連携、あるいは独自に敢えて英語活動として選択してきた理由と実際の園児の反応を考察していこうと考えている。

保育者によって製作された園児のローマ字表記の名前札を活用しての活動など、具体例を挙げ、遊びの中から園児が母国語以外の言語にどのような反応を示し、またどのようにその後の活動展開に結び付けていくのかの考察を進めていく予定である。

参考文献

- 幼稚園教育要領解説、文部省 フレーベル館 2001
- 実践新幼稚園教育要領ハンドブック、無藤隆 監修 学研 2006
- 教育学用語辞典、岩内亮一・本吉修二・明石要一編集 学文社 2006
- Vygotsky, L. S. 著・柴田義松訳、思考と言語 明治図書 1962
- 0～3才脳と心を育てる本、村松邦彦発行 主婦の友社 2004
- 言語の脳科学、酒井邦嘉 中公新書 2002
- 幼児教育と脳、澤口俊之 文芸春秋 2002